

## 第1回宝塚市総合計画審議会 第2部会

日時：令和元年（2019年）9月10日（火）18:30～20:50

場所：宝塚市役所 3-3 会議室

### 1 開 会

出席委員 ※敬称略、順不同

濱田(恵)委員、久委員、藤井(達)委員、藤本委員、飯室委員、温井委員、山村委員、  
今住委員、喜多河委員、久保委員、糸田委員、矢野委員、龍見委員

欠席委員の確認 : なし

傍聴希望者の確認 : 3名

部会長            それでは18時半になりましたので、総合計画の第1回の方を開催させていただきたいと思います。それではまず事務局の方から、委員の出欠状況につきましてお聞きいただきたいと思います。よろしくお祈いします。

事務局            (出席説明)

部会長            はい。ありがとうございます。

事務局            それとですね。本日は質疑等の対応のために、室長級職員が出席しています。また、庁内プロジェクト・チームの若手職員も、傍聴として参加させていただいております。

あと、本日は、全ての室長級職員が来ているわけではありませんので、一部質疑等にお答えできない場合もありますけども、またそれは後日、報告させていただくかたちを取らせていただければと思っております。よろしくお祈い致します。

部会長            はい。ありがとうございます。

### 2 議 事

#### 議題1 部会の進め方及び第6次総合計画の体系イメージについて

部会長            それでは議題の方に移りたいと思います。まずは「議題1 部会の進め方及び第6次総合計画の体系イメージについて」、まずは事務局から進めていただければと思います。よろしくお祈いします。

事務局            (資料説明)

部会長            はい。ありがとうございます。

これから3回の進め方、それから議論をする内容をお示しいただきまして、

資料2が、全体の体系イメージを表していますけども、この左側の基本構想部分を、3回である程度まとめていきたいということでございます。

そのスケジュール分担として、おおむね第2回で、全体の姿というのを一定まとめまして、市民ワークショップにお返しをしたり、あるいはまちづくり協議会の方々の話し合いをいただいて、そこで出てきた意見も反映しながら、また3回目に調整を重ねていって、一定内容を詰めていきたいということでございます。

つきましては、今回は第1回目ということですがけれども、通常こういう審議会は、もう事務局案というのがどんどん出てきて、それに対して意見を重ねていくということになるのが常なのですけれども、協働というスタイルから言うと、白紙の状態から、われわれが自由に議論をさせていただきながら、それを受けて事務局案として一定まとめていただきたいということもありまして、かなり今回、第1回目の部会は、かなりフリーハンドで、いろいろご意見を賜りたいというようなことになっております。

ということで、これからの3回の進め方、それと内容のお話をいただきましたのですが、何かご質問とか、ご意見はございますでしょうか。

全体の進め方はよろしいでしょうか。

それでは、このとおり進めてまいりたいと思います。

## 議題2 まちづくりの視点について

部会長            それでは議題2、早速ですがけれども、まずは「まちづくりの視点について」をお伺いしたいと思いますので、その前に事務局の方から、資料等の説明をいただければと思います。よろしくをお願いします。

事務局            (資料説明)

部会長            はい。ありがとうございます。

さまざまな資料が付いておりますけれども、ちょっと私なりに、どういう意図かというのを簡単に解説させていただきます。

まず1ページ目の「タカラ ミライ ラボ」の提言は、ここにもメンバーさんが何人もおられますけれども、半年間、議論をしてきた内容で、市民側の提言として、このような方向性があるのではないかということをご提言いただいておりますので、議論の一つの大きな柱かなというふうに思います。

それから2ページ、3ページ、4ページ、5ページ。これは人口動態が主ですがけれども、ざっくり言って、どう考えても人口が増えるというのは、なかなか難しいよと。これから宝塚市も含めて、人口がどんどん減ってくるという状況の中で、この10年間、どう考えますかというところを共有したいな

という資料だと思います。

一方で、6ページになってきた中で、そういう人口が減ってくる中で、市役所は、何ができるかということ言えば、税収も減ってきますし、なかなか大変な状況だというようなことで、これもご理解いただきたいという、市役所側からの資料かと思います。

7ページ以降は、同じようなことが日本全体でも起こっている中で、総務省も日本全体の市町村が、今後どのように動いていけばいいのかというところで、研究会を立ち上げて、一定の方向性を示していただいているということでございます。

今日は、先ほども説明させていただきましたように、その前段部分ですね。日本全体でこんな状況が起こるようになって、その中で行政は、こういうことになりますよという部分だけを抜き出しているということでございます。

はい。それではここから、先ほども言いましたように、フリーにディスカッションをさせていただきたいと思いますが、今後10年間、この総合計画を、市と市民、事業者の方々が共に進めていって、一定の方向性を持って、いろんな活動を繰り返していく中で、非常に基本的な、根本的な共有すべき姿勢や、方向性みたいなものを、まちづくりの視点で書きたいということでございます。

どんな観点でも結構です。キーワードに相当するようなご発言がいただければ、またそれを事務局と私の方で整理させていただいて、次回に、一つの視点というかたちでまとめさせていただきますので。

今日は、あまりいろんなしがらみにとらわれずに、意見交換ができたかなと思います。いかがでしょうか。ご質問でも、ご意見でも結構でございます。

委員

すみません。今日のお話のイメージというのは、この資料2の左側の部分で、基本構想というお話でしたよね。その基本構想という話でフリートークをしてくれと言われても、視点的に各論を言っているのか、大きい話をするべきなのかというのがわからないのですけども。

部会長

できたら各論は、基本計画の部分ですので、大きな方向性の議論をしたいなというように思います。

分野ごとの大きな方向性は、次の課題ですね。めざすまちの姿で議論をしたいので。そのさらに背景になる、あるいは上にある大きなまちづくりの方向性とか、視点みたいなものを議論したいなということです。かなりふわっとしているかもしれませんが。

その社会の変化とか、社会の動向とか、あるいは宝塚のこれからの10年後をどのように見据えていって、そしてそれに対応して、どういう視点で、ま

ちづくりを進めていかないといけないのかという、かなり大きな、あるいは柱となる部分を、ちょっと議論をしたいなというような現状でございます。

委員            まだ続きなんですけど、まず資料3の最初に出てきた「タカラ ミライ ラボ」に吹き出しで書かれている、雲のように書かれている、こういうようなイメージの話をするということなのですか。

部会長            雲のようなものは、かなり細かいですね。例えば、「わたしの舞台は たからづか」のような、こういうような大きな方向性を示すような話ができたらなということなのですから。

委員            ちょっとふわっとしているな。例えば「みんなが笑えるたからづか」とか、そういうのですか。

部会長            それでいいです。誰一人、不幸な人をつくらないとかね。そういうようなレベルの議論で結構です。私はこういうような10年後の宝塚の、全体的なまちの姿を望んでいるんだとか、あるいは私自身が10年後、このような暮らしが実現したいんだとか、そういうことで結構だと思いますが。

                  については「タカラ ミライ ラボ」の提言書を、この前も説明いただいたのですけれども、ちょっともう一度、この「わたしの舞台は たからづか」というところに込めた意味というのを、ちょっとどなたか代表して、ご説明をいただければうれしいなと思うのですけども。いかがでしょうか。

委員            正確かどうかは分かりませんが。わたしもこれは、タカラ ミライ ラボで言いましたけども。今日の話からいくと、これから先、人口減少は、もう本格的に宝塚では始まるというところで、やっぱり行政頼りのまちづくりで、自分たちが幸せになれるかと、考えていくところがいっぱい出てくるだろうというところを、やっぱり市民が自分たちでつくっていかなければいけない時代に入ったということを話しました。

                  ここの2行目にある、「市民が主体となり、子どもから大人まであらゆる世代がまちづくりに関わる」というのは、そんな思いがあります。

                  もう一つの論議は、いままでみたいな既存の自治会とか、そういう組織も頑張ってもらわないといけないのだけど、それだけでいいのかという論議で、テーマを挙げてやりたいことをやっている人たちが、まちにはいっぱいいると。しかし、その人たちがやりたいと思っても、どこに持って行って、それが実現できるのかが、いま分からないんです。

                  その人たちが、やっぱり一緒に活躍できて、既存の団体プラス、若い人たちが多くですけど、そういう人たちが舞台に上げられるような、仕組みがないと乗り切れないだろうということで、「わたしの舞台は たからづか」という、そういういろんな舞台を、みんなにあって。そこに上るのは既存の団体だけじゃないよという、そんな思いを込めました。

「わたしの舞台は たからづか」は、イメージとしては歌劇を思い出すの  
ですけど、まあいいんじゃないということで、そんな想いがあったと、私は  
思い返しております。他の方はいかがでしょうか。

部会長

だいたい、いまの委員の説明で、よろしいでしょうか。

まあちょっと私なりに解説をさせていただくと、一言で言うと、自己実現  
がいろいろできる。自分がこういうことをやってみたいなとか、こうなりた  
いなというものが、きちんと自分の手で自己実現できる。その自己実現でき  
ることが、いわゆる社会的な役割みたいなものをしっかりと持つことにもな  
るでしょうし。あるいはそれが、その他の方々へのまちづくりの貢献にもな  
るでしょうし。そういうまい循環が、一人一人の、このまちづくり活動を  
中心にネットワークすると、できるんじゃないかと。

そんな想いが、たぶん私の理解でいうと、この「わたしの舞台は たから  
づか」ということではないのかなというように思うのですけれども。

委員

ちょっと一つ付け加えてもいいですか。雲の中に各論が書いていますけど、  
この一番右の上から二つ。「ゴミ拾いをする」というのは、私が言ったことな  
んですけどね。

単に拾うということではなくて、論議の中で、公園を使っている人が、公  
園が汚いと、なんで掃除をしないんだと言うから、あなたが掃除をしたらい  
いんじゃないのと。使っている人が市役所に、管理者は公園河川課だから掃  
除を行えということではなくて、使っている人が自分で取っていったらいい  
んじゃないかと思う。

それが自分の住んでいるところが、家の前が気になったら、隣の家の前も  
気になるし、駅まで気になるし。そういう、まちに対する自分の関わり方を  
少しずつ広げていくこともまちづくりである。

そういう活動がないと、これからは、さっき言ったように、市役所に全部  
頼むという、そういう時代ではもうないよというぐらい。いろいろここに  
書いてあるのは、市民が自覚して、まちに関心を持つというのも、一つの大き  
なベースだということで、この雲がいっぱいになっているんです。

部会長

はい。ありがとうございます。

取りあえず最初のスタートを切らせていただくということで、「タカラ ミ  
ライ ラボ」の提言書の中のまちづくりの視点の話をいただきましたけれど  
も。いや、私はこういう視点もあるんじゃないか、こういう観点も必要じゃ  
ないかというのがありましたら、どんどん出していただけたらいいと思いま  
す。

先ほど委員からは、「笑顔あふれる」というようなのをいただきましたけれ  
ども、そんな感じでどんどん出していただければというように思いますけれ

委員

ども。

これはもう、他の委員会で出た話で、あちこちで自分もちょっと話をしているんで、聞いたことがある方がいらっしゃるかもしれないんですけど。大きなイメージとして、「女性のまちたからづか」というようなイメージをしたんです。

これは日本全国で、宝塚でしかできないと思う。要は歌劇のイメージがあることで、やっぱり女性のイメージが強いだろうということもあるので。

それで、どういうことをやるかと言えば、大きく言えば、サラリーマンでインタビューを取るといって、テレビなんかで、だいたい有楽町へ行って、皆さん話を聞きますよね。それを、女性の意見を聞くのなら宝塚から聞くというぐらいまで持っていったら良いと考えている。これは商工業だけではなくて、空き家対策にもなりますし。

それで、どういうことをやるかと言えば、例えばどんなことでもいいんです。市長が女性のまちたからづか宣言を最初にしてくれたらいいんです。

そこで柱を3本ぐらい決めてもらって、子育ての一番しやすい仕組みでもいいですし。例えば、待機児童当然ゼロのかたちもつくるとか。女性が起業するのなら、女性の支援をする仕組みとか。一人暮らしでも女性が活躍できるとか、過ごしやすいつか。そういう、女性が求めているものを、このまちが追求していくと。

それで当然、自分は男性なので、女性が住みやすいまちがいいかといったら、べつにそういうわけではないんですけど。このまちが将来、人口を増やすことも考えて、活気あるこのまちにしようと思えば、他のまちではできないような政策を打たなければ当然いけないと思うんです。

それで人口の半分以上が、平均寿命が長いので女性がいます。基本的に女性は賛成してくれる。まあ女性が増えれば、勝手に男性もついてくるといことも考えると、人口増加も見込めるのではないかなと。だから自分は、6：4ぐらいまで女性が増えるとか。なんなら7：3まで女性が増えるような、そのぐらい魅力あるまちまで持っていけることができれば、このまちというのは自動的に人口が増加するのではないかな。勝手に男はどんどんついていきますから。

それでべつに男を切り捨てるとかいうわけではないんですけど。ただ特徴としては、女性が本当に住みやすいまちを追求する。日本で一番住みやすい仕組みをつくってみるといのは、このまちの在り方として、ちょっと面白い考え方としてできるのではないかな。

差別なのか、区別なのかは分からないですけど。これを前の審議会のときにも挙げて、こういう格好で出すと、だいたい市の方で訂正が入って、また

普通のありきたりなものになって、戻って帰ってくるんですよね。だからこれはやっぱり、一部の人の反対というのはあると思うのですが、意外と3分の2ぐらいの賛成は得られるんじゃないかなと思う。一つの考え方としては、非常に面白いのではないかなというので、ちょっと大きな枠でという話でしたので、お話しさせていただきました。

部会長 はい。委員からは、そういうご提案がございましたけれども。それに乗っかってとか、いやいや、ちょっと私は違うぞみたいな感じとかですね。そういうのがありましたらいかがでしょうか。

次の具体的なレベルに入るのかもしれませんが、そういうような大きな、その女性が活躍できるまちを目指そう、社会を目指そうという話になってくれば、まずは率先して市役所の男性職員が、育児休暇をどんどん取っていただくとか、そういうような目標ができたりしていきますよね。

そういう具体的なものにつながるような、大きな何か方向性が生み出せるような、そんな話ができたらなというように思いましたけれども、いかがでしょうか。なかなか難しいでしょうか。

委員 僕は、いまの意見は非常にいいと思います。たいがい、組織でも女性が頭で動いているところは元気のいいところで、非常に引っ張っている。

そういうことなので、やっぱり女の人が引っ張っていているのは事実だと思うので。ただ、男は非常に見栄が強いですから、そこら辺をどうするかというのが難しい問題かなと思うんですけど。それでもインパクトは、この「女性のまちたからづか」というのはあると思いますね。

委員 例えば議員でも、宝塚が初めて男女比率 50%ずつにしちゃうとか。いいかどうかは分からないですよ。ただ、女性を活躍するかたちを、女性の気持ちを分かるまちづくりに持って行ってしまおう。

そういうことが一個一個でもできていって、社会的にそういうイメージを付けられれば、もう空き店舗もなくなるでしょうし、もう全ての商店街で、女性に対するレディースデイみたいなものは必ずあるけど、男性には絶対ないとかね。例えばシニア向けのサービスというのを、もう全部女性に変えてしまおうとか。もうそのぐらい徹底してしまおうんです。

徹底しないと面白みがないので。だから女性が宝塚に遊びに来て、面白いと思えるような、そんなまちづくりができるというのは、一つちょっと仕組みとしては面白いというか、人口増加を目指せるという、数少ない政策かなと思うのですけどね。

部会長 はい、どうぞ。

委員 視点としてはすごく、僕も考えたことはなかったんですけど。市の政策で言えば男女共同参画の時代でやっているし。

宝塚市は、これにも書いていましたけど、平成4年から何十年か、女性ボードというのをつくって、女性の活動をする人たちを350人ぐらい養成したんですね。だからいま、まちづくり協議会の会長だとか、自治会長とか、いろんなところで、この女性ボードの、私は1期とか、2期とかと、そういう意識で紹介してくれる人がいて、かなり中心で発言をしたり、いま委員から話があったように、目立ったところで結構、女性が多いと思うのです。比較はできませんけど。

もう一つは、いまの話を進めるとしたら、宝塚市の女性が、どういう発信をしているのということがある。いまの意見は男性側からの意見ですからね。女性側に自分たちももっとという、そういう意見というのがどうあるかなというのも一つのポイントかなと思います。ちょっとそれは私も、把握できないし、分からないのですけど。

部会長

今日の資料3は、どちらかという宝塚の状況というのが多いのですけれども。私はもう一つやっぱり、日本の状況、世界の状況。つまり、いま社会が大きく変わろうとしているわけですね。そういう情報が、あまりここにはないんですね。その辺りも、もう少し議論をしておいた方がいいのではないかなというように思っています。

一つは、先ほどの委員の女性の話で言うと、2030年というのは、ちょうどSDGsですね。持続可能な開発目標の達成年が2030年なんですね。その17の分野の中で、日本が最も遅れているのが、実はジェンダーの問題です。そういうことで言うと、その2030年に向けて、宝塚が日本のジェンダー問題をリードするんだという話は、SDGsの考え方ともフィットするというような気がします。

そう考えたときにもう少し、宝塚だけを視点に当てるのではなくて、日本全体とか、あるいは世界全体の動きですね。そういうものも、ちょっと見据えておいた方がいいのではないかなというように思っています。

つまり今日いただいた資料は、ほとんどいわゆるトレンド、傾向ですね。このまま行けばこうなる。でも社会の変化は、こういうトレンドでは説明できないことが突然起こったりするわけですね。そういうものにも、ちょっと目を向けていきたい。

具体的にもう一つ言えば、政府が言っているソサエティ5.0ですね。AIがどんどん進出をしてくる。そうしたら、これはもう10年待たずに、ここ数年で世の中は変わってしまうかもしれない。それに対して、われわれはどう準備していくのかということです。

具体的には、来年から小学校の教え方、つまり学習指導要領が大きく変わります。いまの小学生が大人になるころは、いまある仕事の半分はなくなっ

ていくだろうというようなものが、文科省の考え方ですね。そのサラリーマン、いわゆる雇われるという仕事ではなくて、自分で仕事を生み出していかないと、たぶん生きていけないでしょうと。そうすると、小学校からそういう、自分で仕事を生み出せるような、そういう力を育てていかないといけないよという状況になっているわけですね。

この来年からの学習指導要領というのは、かなり大きく、未来を見据えた変革になっていくと思いますので、そこも含めたときに、ちょっとこの10年間というのは、われわれが予想だにしないような大きな変化が起こるかもしれないということも含めて、何か書いておかないといけないのではないかと。

何が起こるか分からないときに書けないですから、そういう大きな変化があっても、柔軟に対応できるような準備をしておきましょうみたいな書きぶりはできるのではないかなというように思いますので、まず一つの視点ですから、具体的な内容というよりも、姿勢の問題とか、視点の問題を書けばいいので、そこら辺も、ちょっと大きな話としてはいるんじゃないかなと。

そういう流れの中に、その委員がおっしゃった、女性活躍というのも、ぴったりと収まってくるのではないかなという気はしますけれども。あとはいかがでしょうか。どんどんフリーで、思いつきのようなことで。はい、どうぞ。

委員

いまの、実は部会長ほど大きな話ではないのですが、この資料3を見る限り、これは市民側からの提案というようなことでは、非常によく分かるのですが。総合計画なので、いわゆる産業の再生とか、創成とか、新たな宝塚の付加価値をどう付けるか。まあちょっと、いまの話は国レベルで大きいのですが。そこはどうしても、ちょっと抜けているのではないかなというような感じます。

その独自性から見たら、観光、インバウンド、それから文化芸術。そういうまちづくりの視点で、他との、とりわけ周辺都市との競争率で測るとか、今後の日本の産業の在り方みたいなものを、やはり模索していかないと。ちょっとここに書いてあるのは、その社会的には非常によく分かるのですが、経済学的な視点がちょっと欠けているのではないかなという、そういう印象を、ちょっと持っているのですが。その辺のそこは、今日ここで議論をしなくていいのでしょうか。

部会長

議論していただきたいと思うんです。「タカラ ミライ ラボ」が始まるときにも、同じようなご指摘を、私の方からもさせていただきました。

おそらく、ここで出てくる提案というのは、いわゆる生活者視点の提案になるであろうと。事業者の立場の方というのは、極めて少なかったですから。

でも、それはそれでいいでしょうと。全てこのメンバーで網羅するのでは

なくて、生活者視点でしっかりと議論をしていただいたら、それは生活者の視点から出てくる。

ただし、総合計画に持っていくためには、やはり事業者目線であったり、他に付加する必要があるということは、ご理解いただきながら提言書をいただいていますので。そういう意味では、この辺りが足りないよとか、こういう分野を、ちょっと付加しておいてもらいたいというのは、どんどん出していただければありがたいなと思いますけれども。

委員

すみません。いまのお話でいうと、タカラ ミライ ラボは、市民のアンケートの意見とか、あるいは、いままでの人口データとかは一切なしで、40人ぐらい集まった市民が、自分の生活感覚で、自分の活動していた範囲で感じたいまのまちで、10年後どうなったらいいなという想いを述べた。

だから市民に限らず、審議会の説明でありましたけど、甲子園大学の学生さんで、宝塚市民ではない人が入って、宝塚に来て、その学校に通ったりすると、こんなまちだったらいいなと。逆瀬川の駅前を、もうちょっとこうしたら私たちも楽しいのにとか、そういう気持ちで、具体的な計画とかは一切知らないで、市民がこうあってほしいというまちを書いている。

委員

決して否定していないですよ。ただ、総合計画であるならば、これはあくまでそういう視点がなければ、ちょっと今後の宝塚の発展、成長をとということ考えたとき、いやべつに、発展、成長しなくても構わないじゃないかという一つの議論もあればいいのですが、そうもいかないということなので。その辺のところと、この市民が主体となった、こういうまちづくりとの接点みたいなものを、どう見いだしていくかという。

そういう意味では、この芸術文化センター、これは次の資料を読んだら出てきますので、それと市民がどう関わるとかというようなことが、非常に重要な視点にもなってくるのではないかなということから、ちょっと産業という視点を、やっぱりこの中に入れておかないと、具合が悪いのではないかなという。

そういう意味で、決してここに出ている、これを否定しているわけではないので、その辺のところは、ご了承ください。はい。

部会長

はい。ありがとうございます。

先ほどの委員のお話をお借りして言うならば、宝塚なりの何か産業とか、にぎわいづくりとか、そういうものを組み込んでいくということだと思うのですね。

先ほどは、観光という視点をいただきましたけれども。もう一つ私は、宝塚らしい将来というかたちで言うと、ローカルに根ざした社会的な企業といった、そういうものが、どんどん地域の中から湧き上がってくる。だから大

企業に勤めに行くというスタイルではなくて、自分自らが業を起こしながら、ローカルの資源をうまく使いながら、産業とか、あるいはにぎわいにつなげていくような。そういう新しい産業育成なんかができれば、宝塚らしさというのも出てくるのではないかなというように思いますけれどもね。

はい。どうも分野ごとにやった方が、話が盛り上がりそうですので、ちょっとまちづくりの視点は抽象度が高いので、次の方に行かせていただいているのですかね。

### 議題3 めざすまちの姿について

部会長            それでは「議題3 めざすまちの姿について」、まずは事務局の方から、スタートを切るための説明をいただければと思うのですが、よろしくお願ひします。

事務局            (資料説明)

部会長            はい。ありがとうございます。

四つの分野を、われわれが担当するというので、あと残された時間は1時間ということになりますと、15分ずつぐらいしか、ちょっと時間がかけられません。とりあえずいろいろ言っただいて、事務局と私の方で、素案というかたちに取りまとめをさせていただきたいと思ひますので、今回はまとめるといふよりも、それぞれの方の思ひを聞かせていただければ、ありがたいなというように思っしております。よろしいでしょうか。

### ③環境

部会長            それではまずは、資料4の最初ですから、3番の環境ということで、最終ターゲットは(4)のめざすまちの状態ですね。ここには例示をいただひていますが、こんな調子で、10年後、こういうようになっていたいなというように話をいただければと思ひます。

分野としたら、そこに書いていますように、都市景観、あるいは緑化・公園、環境保全、循環型社会、都市美化・環境衛生という五つの分野が想定されるわけですが、どの切り口でも結構です。10年後、私はこんなまちになったらいいな、こういう状態になったらいいなというのがありましたら、聞かせていただひたらと思ひます。いかがでしょうか。

委員              また口火を切るように申し訳ないですが、そのめざすまちの姿として、一つタカラ ミライ ラボが挙げられていて、「あふれる自然が夢となるまち」。これは非常に結構なお題目だと思ひます。ただ、視点として例えば、

自然とはいったい何なんだろうと。

僕は環境分野から出てきているものですから、その自然というふうな人の概念というのが、見る人によって、まったく違うと思うのですね。

いま例えば、宝塚市の中で活動しているのが、自然保護だったら西谷の方と、それから武庫山であるとか、きずきの森であるとか、そんなところでいろいろ活動をされていると思うのですけど。それなら西谷に行ったら、自然がいっぱいだというふうにイメージが定着はしていると思うんです。知らない方もたくさんおられると思うのですけど。

ただ、僕が感じているのは、僕自身がやってもそうなのですけども、水田生態系ということに関しては、ほとんど壊滅状態に近づいているのではないかなと。その水田生態系を、いま守らなかつたら、もう僕は守れない状況に近づいていると思います。

でも、まちの人から見たら、いまの田んぼを見たら、非常にきれいで、いまちょうど稲刈りが終わりつつあるところで、ああ、こんなすごい田んぼなんだというふうな感覚でおられると思うのだけど。その水田におるはずの虫であるとか、植物であるとか、そんなものは、もう本当に壊滅に近い状態。それを僕はいま、なんとかしないといけないのではないかなというのが、一番大きな、ここで言わないといけないことだと思って来ています。

部会長  少し私なりに言葉に換えれば、その全ての生きものとともに暮らせる環境の状態を維持する、あるいはつくっていくということでしょうかね。

委員  そうですね。大きく言えば、この自然というべきか、自然でいいんですかね。ただ、やっぱり視点としてどうなのかなと。

部会長  いろいろな意味で西谷の方の立場で言うと、市街地に住む人は、眺めるだけで結構だけれども、誰がそれをちゃんと守っているんだとか、そういう維持管理をする立場と、やっぱり眺めるだけの立場をうまく組み合わせていくというのが必要なわけですね。

委員  圃場整備をすることによって、どんどん、どんどんそれはもう駄目になっていっていますから。

部会長  そうですね。はい。どうぞ。

委員  僕も大賛成で、関連するのですけど。僕もこれは付け加えてほしいかなと。

視点として実は、平成 27 年に、2015 年に環境省が、生物多様性国家戦略の中で、生物多様性保全上重要な里地里山 500 選というのを選んだんですね。兵庫県で 24 件、宝塚で 2 件。西谷の里山というのと、私の住んでいる中山台ニュータウンの中山台のまち山というのが、500 選に選定されたんですね。

要するに両方とも、西谷は里山として、生物多様性保全上、非常に重要な地域であると。中山台というのはもともと里山だけど、住宅開発で残った里

山をまち山と名付けて、まち山の保全上、中山台ニュータウンの周辺は、非常に重要なところだと国から指定されたのに、それが認知度がないんですね。宝塚市内で。

それだけいまのお話も、西谷の里山を保全するには、そういう 500 選に選ばれた地であるということ、それも一つの大きなバネになるのではないかと。そういうのもきちんと入れて、まず市民がそのことを知らない。

宝塚市は大学に言って、看板をつくってくれということも時間がかかりましたけど、せめてそういう地だということで、去年か、一昨年か、西谷と、中山台のコミセンのところに、そういう地であるという看板を環境部でつくってもらいましたけど。非常に重要なことを忘れられていると思っています。

部会長 はい。ありがとうございます。いかがでしょう。他の分野、他の観点でも結構です。

ちょっと委員に振らせていただきますけども、逆に子どもさんの環境教育の場面とか、何かそういうかたちで、うまく自然を使っていらっしゃると思うのですが、そんな観点で、何か環境のところで思いがあったら聞かせていただきたいと思うのですが。

委員 そうですね。宝塚市は都会に住んでいる子どもの方がほとんどなので、食べものの、なっている姿も知らないとか。そういう何か、自然を生かすということに対して、普段触れることができないので、そういうことで、やっぱり環境教育という意味では、もっともっと西谷であるとか、中山台とかでされているのを知ってもらって、関心を持ってもらわないと、子どもたちはこの先、守っていこうと思えない。

なんで守るのかというところが分からないと、やっぱりそこは守っていけないのかなというのは、いま活動をしている中で感じているところです。

部会長 はい。

委員 子どもとの関係で今度、兵庫県で今年、緑の少年団の兵庫県大会というのが、西谷の森公園でやるんですね。各地に、兵庫県内には 260 団、緑の少年団という、小学生で学校の先生が付いたりしているグループが、あちこちで活動して、その表彰式みたいなものがあるのですが、宝塚はゼロです。緑の少年団がない。

この辺はやっぱり、そういうところが具体的な課題だと思いますので、やっぱりいい景観があって、環境教育にも素晴らしい場所があるのに生かされていない。子どももそういうのを、環境教育だけではなくて、そういう緑の少年団をつくっていこうとかという動きがあれば。この 10 年間で、そういうのが充実したらいいかなと、僕はすごく思っています。

部会長 はい。なんでちょっと委員に振らせていただいたかということ、常にそうい

う活用でうまくやっていますので。そういう自然環境だけではなくて、次の緑化・公園もそうなんですけど。いま世界中でプレイスメイキングといって、公園とか広場を使いながら、自分たち市民自らが、まちを楽しくしていこうという試みが、どんどんあるんですね。

だから物理的にそういう環境を守ったり、あるいは公園をつくったりするだけではなくて、そこに、どのように市民が関わって活用していくか。その活用が、さらに保全管理につながっていく。何かそんな仕掛けみたいなものを、宝塚はもっともっと充実していただければ、せっかくあるいろんな資源が、もっと生きるのではないか。

例えばもっと具体的に言うと、その前の末広中央公園もそうですし、立派な公園がどんどん出てきているわけですよ。さらにこの隣も、また駐車場の辺りも、川側の方が整備ができますし、いろんなそういう、すてきな空間が出てきていますから、そこをうまく活用する。西谷に行けば、自然が活用できると。何かそういうシナリオはないのかなというように思います。はい、どうぞ。

委員

ちょっとまちづくり協議会の会議のときにお話があったんですが。一小校区というのは集合住宅がすごく増えていまして、そのマンションにおける、その区画の中で提供公園が、こんな小さい公園が、マンション群に一つ一つそれぞれ 51 棟あると。

それである意味、キャッチボールも何もできないし、ただ単に、本当に小さい子どもが、ベンチでお父さん、お母さんとゆっくり座っているぐらいのスペースしかない。

先日、公園河川課の方が来られまして。いわゆる公園と、公園をつなぎ合わせるような働きかけができないかというところで、中山の方だったか、何かそういう事例も出てきているということもありますし、やはり小さい公園があっても、結局何もできない。なおかつ、私は初めてあるとき聞いて、初めて知ったのですが、キャッチボールとか、ボール遊びをしたらだめだというのは、私は市役所の人が出たからと思っていたんですよ。それで禁止されていると思っていたら、住民からだということも初めて知った。

やはり公園の在り方というところで行くと、そのマンション群は、割と若いお母さま方世帯の方も多いので、やはり子どもに、なるべくキャッチボールさせてあげたいのではないか。

例えば末広中央公園に来るまでに、やっぱりすごく時間がかかりますし、西谷にも行こうと思ったら、前にも言っていたように、車とかじゃないと行けないということもありますので。やはりその部分で身近な公園を、どう有効活用していくかということも、うちのまちづくり協議会の中では話し合っ

ているのですけども。はい。

委員

私は結構、山歩きをするんですね。この近辺ね。他市と極端に違うことがあるんです。最近特に感じるのですけど、山を歩いていて、道の案内板が、西宮市はかなり懇切丁寧に、行政のやっぴらっしゃる案内と、たぶんボランティアグループか何か、山歩きのグループが設置していると思うんですが、宝塚は皆無です。ほとんど分かりません。マップを持って歩いても、よく迷うんです。

だからそういう簡単にできることから、緑に親しむというのか、そういう気風をつくるというか。ちょっとした優しさみたいなね。そういうところから始めることが大切じゃないかなと思う。

委員

サインがないということですね。看板がない。サインがない。

委員

サインがほとんどありません。はい。右に行く、左に行くとかね。分かれ道とかね。そういうことですけどね。

部会長

はい。他はいかがでしょうか。ちょっと循環型社会とか、その辺りを一言二言いただければというように思うのですけども。具体的には、もっと分かりやすく言うと、ごみの問題とかですね。

委員

すみません。私は実際、ごみの焼却炉がどうなるのかというところが、興味があるところなのですが。やはりあれはもう、古い状態になっているので、変更するようになっているわけですよね。どうなんですか。

部会長

その辺りは説明していただけますか。焼却場の今後ですね。

市職員

いま基本方針としては、現状のところ建て替えをするという話になっていますね。

委員

それは何年に建て替えなんですか。

市職員

もともと2年遅れているから、平成で言うとも38年になるんですかね。令和8年ぐらいになる。

部会長

令和8年。3年遅れぐらい。

委員

令和8年。じゃあこの10年間の間で。

市職員

もともと平成で言ったら、36年ぐらいに建て替え予定だったのが、2年ほど遅れるような話になっている。

委員

基本的には、いまのを稼働しながら、敷地内で移築するんですよね。

市職員

稼働しながらでなんとか。はい。

委員

稼働しながら。じゃあ一つの焼却炉でしかできないということですね。

委員

段階的にやっていこうということでしょう。

委員

20万都市だったら、やっぱり必ず一つ、あれぐらいの規模のものがいるのですか。例えば広域連携で、例えば能勢町と、川西市と、猪名川町は三つでやっていますよね。あんなふうなかたちで、どこか近隣のところと、キャパ

- の問題があると思うのだけど、そんなふうと一緒にやるとか、そういうのは。
- 市職員            そういう市もあります。伊丹市とかであれば豊中市と一緒にやっているところもありますけれども、今回の場合については、いまの現状のところ建て替えをするという話になっております。
- 委員                そういう議論はあったの。
- 委員                それは審議会をやったりね。
- 市職員            もともと西宮市に声を掛けたりとかいう話は、事前にはいろいろあったように私も聞いていますが、ちょっとそこは聞いていないのですけど。
- 委員                審議会で論議をして、パブリック・コメントにも掛けたりして、その方針をつくっていますよね。
- 委員                そうなんですか。効率の悪い時代だなと思って。
- 市職員            そうですね。
- 委員                燃焼率の問題もあるし。
- 市職員            それは、そういうかたちでいったら、例えば焼却炉もそうですけれども、例えば火葬場もそうですし、病院もそうですよね。まあそういうかたちで、みんなで1つ大きいのをつくればというような話も、それはまったくないわけではないと思うのですけれども、なかなかそういう、うまいことタイミングが合わなかったのかも分かりません。
- 部会長            おそらくその辺りは、これからの都市経営のところでも、おそらく議論をできるかなというようなものですが。
- 先ほどの話、総務省の自治体戦略2040構想研究会の話が出ましたけれどね。その中でももう、各市町村がそれぞれ個別でやるというのは限界だし、非効率なので、そろそろ広域的にいろんなことを、手を組んでやりましょうよというのは書かれていますので、おそらくその辺りは、これからの都市経営の中でも書き込める話ではないのかなというのを思うんですね。そうするとごみの焼却場だけの話ではなくて、いろんなものをシェアしていきましょうというようなことになるのだらうと思いますけども。
- はい。あと環境で言っておきたい話がありますか。
- 委員                すみません。カラスとアライグマの、あまりに多くなっているの、私たちの武庫山地区なんかは、アライグマが前に14頭捕れましたので。やっぱり正直、すごい繁殖率ということもありますし、武庫川の河川敷に、カラスに餌をやっている方もいらっしゃるし、やっぱりその、有害と言っはいけないのですか、そういうことは。
- 委員                いえ、構いません、べつに。有害鳥獣ですので。はい。
- 委員                大丈夫ですか。はい。というところで、ちょっと。この辺をどうまとめるかは分からないんですけど。

部会長 先ほどの委員の話が無理やりまとめて言うと、やっぱりその、人間が自然の生態系に悪影響を与えるようなことをするなということですよ。アライグマを放すからあんなってしまいましたね。そのカラスだって、ごみの出し方の問題だったり、餌を与えてしまうので増えていくとかね。そこらへんは、何か共通したキーワードが見つかるんじゃないかなとは思いますがけれども。

委員 植物でもオオキンケイギクとかね。いろいろありますし。

委員 タカを放すとかね。タカを放したら、カラスがいなくなるとか、よく聞くので。

委員 宝塚はこれだけ自然が、自然の山に囲まれているから、イノシシとか、クマとか、シカとかはもうしょうがないですね。

委員 いっぱいいますよ。

委員 いや、絶滅させるわけにはいかない。

委員 もちろん、もちろん。

委員 いかにか共存できるかという。中山五月台幼稚園は、もうすぐなくなりますけど、裏山を山にしているのね。園児はそこに入るときに、フェンスに止められてますから、「お邪魔します」と言うんですよ。ここから向こうは生きもののすみか。その領域で、自分たちはそこで遊ばせてもらうというね。そういう感覚を幼稚園では習っています。

お母さんたちが後から入ってくると、後ろを振り向いて、「言うことがあるでしょう。お邪魔しますでしょう。」と子どもがお母さんに言うんですよ。それがいいかどうかは分かりませんが、自然とどう共生していくかというのは視点として大事ですよ。

部会長 ありがとうございます。他に環境はいかがでしょうか。

ちょっと私の方から情報提供なんですけどね。茨木市の総合計画の中で、私はすごくすてきなキャッチフレーズかなと思っているのが、「心がけから行動へ」というキャッチフレーズがあるんですね。みんなで作る環境に優しいまち、「心がけから行動へ」というのは、まさしく市民がどうすべきか。つまり心がけていても駄目ですよ。頭で分かっているのではなくて行動しましょうよというところを言い切っていますので、そこら辺を、市民も共に環境をつくっていく、守っていくというような、そういったキャッチフレーズもあった方がいいんじゃないかなというようなものなんですけれども。

## ②観光・産業

部会長 それでは時間的にもいい時間になりましたので、続きまして、②観光・産業のところで、いろいろキーワードとか、ご意見を賜ればというように思い

ます。いかがでしょうか。観光、それから商業、さっきの工業、農業、雇用、それから勤労者福祉、消費生活。かなり幅広になっておりますけれども、いかがでしょうか。はい、どうぞ、どうぞ。

委員 すみません。商業の専門家なので、非常に気になっているのですが。このまち中の商業は、どうしたらいいのでしょうか。僕はこれ、行政であるより、市民の人にちょっと聞きたいなと思って。

ここにも書いてある高級品などの購入場所は市内ということで、当然日用品とかそういうものは、郊外のスーパーとかショッピングセンターで買われている。それは、決して悪くないんだけど、市民が主体でまちづくりをするということは、逆に言えば、少し高くてもまちなかで買うという心理的なものもなければ、なかなか、まちなかの商業は活性化しない。

それはあくまで理想なので、現実にはできないんですが、商業の問題、まちなかの商業、僕も答えはないんですけど、どういうふうに総合計画で捉えるのかなというのが、非常に気になっているんですが、市民の人に僕は聞きたいんですけど、どうですか。行く店がないとか、魅力がないとか、それははっきり言ってもらったらいいいんでしょうけど。

委員 私は車に乗らないんです。車に乗らないので、住まいは阪急宝塚駅から山手に上がったところの紅葉ガ丘というんですが、本当に徒歩圏内で行けるようなところで、食品以外が購入できるところって、ほとんどないんです。少し前は逆瀬川辺りも西武があったりとか、ジャスコだったり、あそこはね。いわゆる大型店舗というのが全部撤退して、特に衣服を扱うお店がほとんどない。

委員 中小小売店ね。

委員 そうです。だから、着るものというのはユニクロとか以外に購入する場所がないというのが、たぶん私たち世代から若い方というのは、ほとんどそう。西宮に出るか、伊丹に行くかしかない。

委員 たくさんありますもんね。

委員 現実問題、そうなんです。

委員 食品は、まちなかで買っているんですか。

委員 買っています。

委員 それは買っています。

委員 買っているんですか。

委員 はい。食品は買います。

委員 まだ救いがありますよね。

委員 わざわざそこは市外まで行かないね。

委員 そこまでは行かない。市外までは。重たいですから。

委員 　ただ本当に食品以外を購入する場所はない。だから、住み続けたいというところは、なかなか難しいかなというのは思います。やっぱり高齢者になって、車に乗れなくなってしまうと買いに行く店がない。それだからといってネット販売とかでというのもなかなか難しいと思う。宝塚を私もすごく大好きなんですけど、ちょっと宝塚って不便だなと思う上位三つに私は入ります。

部会長 　委員が、いま投げ掛けてくださいましたけども、それを10年後どうするかですよね。だから、もっと宝塚でいろいろ買い物ができるようにしたいとか、そういうようなものがあればここに書けるのではないのでしょうか。

委員 　そういうお店を誘致するような方法があればと思う。なぜ出ていっちゃうのかなって。どうして定着しないのか。

委員 　どちらかという宝塚というのは、全ての駅に対して、小さい商店街が全部あって、駅間競争をやっていたんです。それで、大型ショッピングセンターを入れてしまうと、全ての近所の商店がつぶれてしまうと。だから、認めてこなかったわけです。

でも、実態としては西宮市にガーデンズができて、伊丹市にもダイヤモンドシティができて、昆陽にももう1個できた。昆陽の入店来場者の7割の人は、宝塚市民を実はターゲットにしている。それで、いまの小さい商店にいる人たちというのは、いまが守られていればそれでいいわけですよ、言い方はよくないですけど。でも、後継者はいるのか、今後続けていくのかといったら、たぶん続けない人の方が多いわけです。

ということは、やっぱり10年後にどうあるべきかといえば、大型ショッピングセンターをいまさらつくってくれるかどうか分からないですけど、本当は1個ぐらいどんとあつたら、将来のためにもそっちの方がいいのではないかなということは思います。

あと洋服なんかは、さっき言いましたけど、たぶんネットなんかで買うのが当たり前な時代じゃないかなと。そういうのが高齢者でもみんな、服のサイズがぴったり合うような仕組みが出てくるような時代も来るのかなというふうに思っています。

あとちょっとついでに観光なんかでいいますと、今度、宝塚ホテルが来年の5月にオープンします。そうすると、いま、百二十何室だったかな。部屋数があるんですけど、それが200室に増えるんです。ということは、自動的にシングル部屋が非常に多いのであれですけど、部屋数としては増える。

ただ、泊まるということはどういうことかなと思うと、自分が泊まる場所は、必ず夜が楽しくないところには泊まらないです。必要最低限です。別に夜に遊ぶ気もない、外へ行く気もない、田舎だとかいうのはしょうがないですけど、でも、宝塚で用がもしあるのなら、自分なら大阪に泊まってしま

います。車でもいいですし、電車でも来られるわけですから。夜がつまらないところに人は泊まらないと思う。

10年後のイメージでいえば、自分は一部でいいですけど、宝塚から宝塚南口をぐるっと1周回ったぐらいで、やっぱり夜遅くまで開いているお店、もしくは飲み屋さん、そういうのをある程度整備というか、みんな近所も含めて認めてあげて、それで、商業の人でも、もうちょっと遅くまでやってもらうとか、そういう仕組みはやっぱりお互いに取り組んでいく。みんな行かないから閉めるというのもあるでしょうし、みんなで行ってあげて、みんなを支え合って遅くまで少しでも運営できる、そんな仕組みは、やっぱり必要かなというふうに思います。

委員

付加価値をつけないと絶対駄目でしょう、小さな商店なんか。商工会議所で、ワンコインでスタンプラリー、あれは10年かな。もう続いているんです。やっぱりそういうものをつけると、300ぐらいのお店が参加しています。そこを知ることによって、そこと親しみができて、まちなかで買おうかとなる。でも、ものすごくやめるのも多いが、逆に言うと、300の店が手を挙げて、まだ宝塚で商売をしようと、なんとかしようと思っている、その人たちの気持ちがあるということは、まだ可能性があるというふうに思う。

いま、取りあえず商工会議所が主になってやっているけども、もう少しこれを広めて、業態も広めて、やり方によって宝塚で買い物をしようという可能性があるような気はするんです。ネバーギブアップだとは思いますがね。

部会長

先ほど委員の話の延長上で話をするんですけど、郊外をずっと研究している三浦展さんという方がおられますけども、彼が2年ほど前に『東京郊外の生存競争が始まった』という本を書いているんです。生き残る郊外住宅地と、もうだめだろうという住宅地が、そろそろ出てきている。このサブタイトルが、皆さんにも考えていただきたいんですけども、「静かな住宅地から仕事と娯楽のある都市へ」と書いてあるんです。

委員は、先ほど宿泊客の話ターゲットにしてお話ししましたが、実はそのベースをつくっているのは、われわれ暮らしている人ではないかなと思うんです。いままでのように寝に帰るまちであつたら、夜も楽しくないわけです。だいたい自分の働くところの近くで飲んで帰ってしまうという話になってしまいますよね。

逆に三浦さんがおっしゃっているのは、ここが仕事の場所であれば、この夜が楽しくないと、あるいは、ここで遊べないと面白くないでしょうと考える。そうすると仕事を生み出すことができれば、それがまちの夜も楽しくなる、娯楽も楽しくなる。そういう魅力的なまちには、どんどん人も集まっ

てくるということかと思うんです。

ちょっと私事になりますが、私は、いま、大阪の茨木市に住んでいますけども、茨木市で働く人と暮らす人が、だいたい半々ぐらいなので、私たちも夜になっても家族でいろんなところに食べに行けるんです。ただ、それはやっぱり働いている人たちが、ベースをつくってくれているという部分もあって、それは単にその一つ場面で切り取っても、私は駄目だと思っていて、このまちのベースのつくり方というのをどうするのかという話が、結局観光とか娯楽、あるいは、購買にもつながっていくんじゃないかと思うんです。

委員 いいでしょうか。

部会長 はい。

委員 専門家ではなくて、住民としてなんですけど、宝塚駅、宝塚南口、逆瀬川の辺りというのは、飲み屋とかそういう店の環境がすごい充実していると思います。夜、とても楽しいですよ。他のまちよりも、宝塚へ帰ってきて飲もうと思いますよね。

委員 宝塚南口は充実した。

委員 充実してますでしょう。

委員 飲食はいいですよ。

委員 あれも不思議なんです。宝塚南口とか宝塚って、住宅街にぼこぼこって店があつたりする。あれは、宝塚の歌劇ファンが土壌をつくっている感じがするんです。歌劇出身の人が店をやっていたりとか、歌劇のファンって、あんまり大型店に行きたくないんですよ。ちょっと隠れ家的なところだったりとか、ファンのやっている店でとか、そういうのがすごく面白いと思っています。

委員には申し訳ないんですが、私も 50 代後半なので、そう思うのかもしれないですが、大型店というのが嫌いというか、あのでっかい箱をどんとつくって、景観的なこととか、ああいうものを望んでいくのか、宝塚って割と個店の文化が育ってる感じがするんですよ。すごく誇りを持って、飲み屋さんなんかもやっているし、むしろチェーン店よりも小規模なところの方が、元気があって売れていますし、そっちの乗りの方をもっと応援したい感じ。

部会長 いまの議論はなかなか重要で、いま、ここでは観光産業をターゲットに当てる話をしていますけども、どっちの方向へ持っていくか。ショッピングモールをつくるのか。あるいは、隠れ家的な店を増やしていくのか、まったく違う方向性がいま出てきているんです。ここを本当に 10 年後、どっちを目指して行きましょうという話です。

委員 イメージ的にいえば、苦楽園って割とそういうイメージじゃないですか。苦楽園のあの界隈というのは、もちろん飲食店だけではなくて、意外とおし

やれな雑貨のお店があったり、お洋服の店があったりとか。いま、委員がおっしゃったイメージだったら、やっぱりそういう苦樂園とか、大型店に依存しないような個性的で、それこそ女性の視点といたらあれなんですけど、買い物をするのは女性が大半だと思うので、宝塚らしいテーマに合った店舗が集まれば、もっと活性化していくんじゃないかなって。

委員 最初の議論のまちのイメージというか、最初の資料3でやっていた議論も、「私の舞台は たからづか」ということは、すごくいいなと思うんですけど、それはたぶん女性のと同じように少数派というか、女性とか、大型店舗より個店とか、大企業より小売店や、起業するようなところとか、小規模な農業とか、持続可能なエネルギーとか、大きいもので何かみたいな感じよりも、そういう小規模なもの、どっちかという、少数派みたいな人が、輝くまちみたいなことを言っているのかなと思って、そういうのに焦点をすると、すてきだなと思ったりしました。

委員 すてきだというのはよく分かるんだけど、いわゆるいぶし銀的なところについて、若者はそれで喜ぶかと思ったら、やっぱり喜ばないと思います。

委員 そうですかね。

委員 僕は思います。やっぱり若い子は、西宮ガーデンズへ行きたいと思いますよ。

委員 そうなんですか。

部会長 ここでちょっと方向性を議論しておきたいのは、そういう西宮ガーデンズのようなところへ目指すのか。いやいや、勝てるわけじゃないかとか。やっぱり宝塚は、宝塚なりのきらりと光る店とか、隠れ家的な店とか、そういう個性ある、特徴ある店をネットワークして、宝塚らしいにぎわいとか、産業活性をするというのか。大きく方向性は二つある。

委員 僕らの視点としたら、それは後者の方がいいですけど。

委員 高齢化社会は、ますますこれから出てくるんで、若い人が必要なんです。

委員 若い者を呼び込むまちとかって言っているのにもかかわらず、そういう視点がないのはどうなのか。

委員 いまのお店の話、私もいろいろごった煮で小さいお店を見て回る方が、私も楽しいですし、あと若者、学生たちを見ている、どんな辺りなところでも、話題のところには並んでいきますし、取りあえずどこかへ行こうかだったら、どうしても大型とか行っちゃいますけど、いまやもう情報はスマホですぐにゲットして、インスタでいいのが出たから行こうと行って、すぐどんなところでも地図を見て行ってしまいますから、そういういろんな魅力が宝塚に集まっていれば、若者は大型店舗がなくても来ると思うんです。車がなくても。だから、私も後者の方向性の方がいいと思います。

委員 宝塚って、駅が13もあって、それぞれ発達してきたから、やっぱりぼんと真ん中に大きなものというのは、それは無理だと思います。

あとは、情報の発信の仕方だと思うんですけど、テレビでまち歩きを見ていたら、スマホでおいしい店が検索したら分かって、そこに一直線で行くのだが、それを忘れたため、まちを歩いて店を探していたら、いろんなものがあるのに初めて気が付いた。じゃあ、そういう動きをするんだったら、ネットにどんどん貼るというのも含めて考えないと、対面で売るというだけでなく、13も小さい駅に小さいお店で、特徴のあるものをつくるのであれば、そういう工夫をしたらどうか。

委員 ComiPa! が新しいお店をすごく発信されていますよね、

委員 そうなんです。また今度10月にはソリオに、銀座に志かわ食パン屋さんがオープンされますし、やっぱりそういう新しいネタを、どんどんブログで発信して行って、タピオカのお店のオープンとかだと、1日に2万件ぐらいアクセスがあるんですよ。

だから、やっぱりそういう本当に新しいネタとか、閉店情報もすごいヒットするんですけども、それをずっとやり続けることが、うちの業務なのかなというところではあります。

委員 それは新陳代謝が働いているということでしょう。そういう店も入ってきているし、あんまり何もしなかったら、それはあくまで退店していくと。みんながみんな何もしないと、そんなことをやれるような時代でもないわけで、新陳代謝ができていうちは、まだまちは、ある意味、正常だと思います。

委員 そうですね。ハワイアンカフェも平井6丁目にできますし。

委員 入ってくる方からすれば、やっぱり魅力はあるんですよ。

部会長 そういう情報発信の仕方も、いまからかなり面白い仕掛けをしていくとか、あるいは、一つ一つの店だけじゃなくて、それをネットワーキングして行って、魅力をより相乗効果として高めていくとか、そういう戦略の方が、宝塚らしい観光産業なのかなという気はします。

委員 最初に委員が言っていた女性という部分にスポットを当てるんだったら、女性が起業しやすいまちであるとか。ただし、そのためにはやっぱり起業をするために、セーフティーネットかなんかが要るのではないかなと。男にしてもそうですけどね。タピオカがはやったら、2カ月はやってつぶれたという話だとどうなのか。それを行政が見るかどうかというのは、問題になるかどうかは分からないですけど。

委員 もう一つは、商店の視点ですけど、住民側の視点からしたら、このニュータウンですけど、真ん中に商店街がある。それをみんな利用するわけです。だから、これからまちづくり計画にそのファミリーセンターの活性化とい

うのは、住民で入れるんですけれど、住民はこれが欲しいよというのを、商店の人に発信をする。やっぱり利用者、商店とかを利用する人のニーズに合った商店があればどうか。住民側に立って、何が必要かという視点も、僕から見ると、商売する側がもうけるかどうかで行ったけど、駄目だったということで撤退しちゃって、ファミリーセンターがあるけど、結構空き家があるわけです。そこら辺の工夫は、商店側と住民側と一緒に考えないと、活性化というのはかなり難しいのではないかと。一緒に考えればなんとかなると僕は思っているんですけど。

委員　　いままであんまり住民側が入って、一緒に商業を活性化するという話は、あんまり聞いたことがないですね。

委員　　そうですね。でも、自分は平成10年に来たんですけど、例えばラーメン屋でも、宝塚には珉珉しかなかったイメージですよ。それで、なぜないんだろうと思ったら、やっぱりどんどんできてきたんです。それで、ちょっと前であれば、喫茶店なんていうのは皆無でしたから。それで、山本の方にらんぷとか、ああいうものができて、混むようになってきたら、そこらじゅうにできるようになりましたよね。

委員　　コーヒー館、いっぱいありましたよ。

委員　　平成10年にはありましたよ。

委員　　いやいや、超小規模なお店はあるかもしれないですけど、若い人が行くような、スターバックスはいつまでもなかったですし、そういう大型店的なもの、一切なかった感じがしますね。

さっきの、皆さんが小規模でやりたいというのは、全然構わないですけど、要は、市内でみんなで買い物をしましょうというんだったら、選択肢はあるに越したことはないかなと。

だから、市外にみんなが行って、当たり前のように買い物をするのは、べつにそれはそれでいいんだと。それで、個性的な特徴があるものをいっぱい宝塚へ出して行ってと。

それは、理想形で言えば、自分がさっき女性の起業という話をしましたけど、要は女性をターゲットにしている企業、そういう商品、お店があるんだったら、本当に女性をターゲットにしているんですか、みたいなそのぐらい言えるぐらいになれば、本当に勝ちだと思えるんですけどね。

それはもう、もう一息いくと、例えば池田泉州銀行でも、女性しかいない支店をつくっちゃうとか。もしくは、宝塚市の支店は全員女性が支店長であるとか。例えばのイメージですけど、もしかしたらそっちの方が売り上げが増えたり、違った成果がもしかしたら見えるかもしれない。宝塚だからできるみたいなことをやってみたら面白いかなとか。

部会長 いろいろ話が増えますけども、また、まとめさせていただければと思います。

#### ④文化・国際交流

部会長 それでは、続きまして④文化・国際関係ですけれども、いかがでしょうか。

委員 先頭を切って。いいですか。まずは質問なんですけども、このところです。項目、ページが半分しか書いていなくて、少ないのはどうしたものかというお話がありましたけど、市の現状の認識・特性、ここにまとめてあるのは、文化政策が述べたものを簡潔にまとめたようなことですか。

事務局 この文化・国際交流ということでまとめさせていただいたのは、基本的には「タカラ ミライ ラボ」からいただきました提言書の「めざすまちの姿」というものをベースに、シートの方を作成させていただきましたので、基はラボの提言書ということで、この文化・国際交流という分野でまとめさせていただいたということでございます。

部会長 意見交換の中で少しまとめ方とか、編集の仕方を変えていくということもあるということですね。

事務局 そうです。冒頭に申し上げましたように、例えば産業との結び付きが強いということであれば、そこと一緒にするとか、そういったことにつきまして、またご意見をいただきましたら、事務局の方で考えていきたいと思えます。

委員 質問があるんですけど、5次総合計画のこれのくくりは、観光、文化、産業でくくってあって、それで、国際交流はその中の文化・国際交流という各論に入っているんです。それをこの二つに分けて、観光と産業だけにして、文化と国際をつけて、国際をちょっと格上げしたんですね。この仕切りは意図的にやったんですか。5次総合計画と違うくくりにしたのは。

事務局 5次総合計画では、観光、文化、産業と基本目標の中に文化・国際交流という施策がございますので、いま、5次総合計画を取りあえずベースに議論をいただくということですので、この国際交流の扱いをどうするのかというのは、また6次総合計画の中で議論していけばいいかなと。

委員 6節で一つだったのが、これを今度は二つに分けたんですね。分ける必要があったのか。だから、前の方が少ないから国際交流を、6節の観光、文化、産業の文化に入れたんじゃないか。

事務局 観光、文化、産業と一緒になくて、出てきているのは、もともと「タカラ ミライ ラボ」の提言書を基にしているの、文化・国際交流が、タカラ ミライ ラボの方で分かれたということが始まりなんです。

委員 でも、タカラ ミライ ラボのこのくくりも、市の方の提案でくくっただ

け。住民がこれをこういうふうにくくれと言ったわけではない。

部会長

だから、くくり方を気にせずに、いまは文化・国際交流というところで、ご意見を賜ればということかと思います。

委員

いいですか。すみません。今度できる文化芸術センターがどういうものか、ちょっと私はよく分からないんですけど、文化都市をすごく宝塚は言っているんですけど、近隣を見ていると、結構大きなホールがたくさんある中で、宝塚だけ大きなホールがなくて、ベガ・ホールだったり、ソリオホールだったり、小さいホールが幾つかあって、文化都市といっているのに、コンサートができるような立派なでかいホールというのか、でかいホールをつくるのがいいのかどうかはべつなんですけども、ちょっと中途半端なものが多いなって、ずっと働いていて感じるんです。

さっきの前のところでも、ちょっと言おうかどうしようか悩んでいたんですけども、それこそ大きなものにするのか、小さいものにするのか。すごく中途半端なものが、いろいろ開発されているなという感じをすごく受けていて、じゃあ、どうしたらいいんだという話だとは思うんですけども、やっぱり何をしたいのか、どういうまちにしたいのかというのが、いままでの結果がこうだったのかなというような感じがしたりもするので、宝塚はやっぱりこれでいくんだ、温泉でいくんだ、観光でいくんだ、歌劇でいくんだと特徴のあるような、これというものが前面に出るようなものがあればいいのになというのを感じました。

部会長

その延長上で、私は文化ホールを計画するときも、いろいろお手伝いをして、実際に茨木市で市民会館の建て替え事業をやっているんですけど、ホールの大きさ、容量を決めていくときに、大きく二つの考え方があって、千人規模の大きなものをつくるというのと、300人以下の小さなホールをつくるという。それは何のためかという、市民が自分たちの活動を表現したいというときは、千人集められる人って、極めて少ないわけです。ですから、自分たちの活動発表をやろうと思ったら、小さなホールがたくさんあった方がいい。

一方で、いいものをどんどん見たいという話、鑑賞をしたいとか、見たいという話であれば、大きなホールがあった方が、立派な人が来てくれるというので、これも大きく方向性が二つに分かれるんです。

どっちの方を目指すのか。両方を目指すという話もあってもいいんですけども、その辺りを議論しておけば、さっきのお話というのは受け入れられるのかなと思います。

ちなみに文化芸術センターは、私は立ち上げのときからずっとお手伝いをしているんですけども、私たちの方は、どちらかという、鑑賞するのでは

なくて、みんながここで共に生み出していく芸術文化、その拠点にしたい。館だけではなくて、ここを中心にまち全体の中に文化芸術があふれていくんだと。その拠点にしたいなというのが、この新しい文化芸術センターの思いなので、そこをお伝えしながら、さらにこれからの文化・国際交流はどうするかというところで議論していただければと思いますが、いかがでしょうか。

#### 委員

確かに大きさも文化芸術センターは、中途半端といえば中途半端です。中途半端ですけれども、そういうことではなくて、いま、会長がおっしゃったように、そういうふうなそこで場があって、そこで事が起こっていく。すごい世界的に著明な芸術家が、そこで大個展をやって、行列をつくって、人がいっぱい来てということを目指してはいないんです。そこで本当に普段から子どもたちもふらっと立ち寄って、何か工作を楽しんだり、工作だけじゃなくて、絵本もたくさんあったり、何かそこに行くと、面白いことがある。ふらっと立ち寄って、お茶を飲みながら、大人も子どもも一緒に楽しんで、それがだんだんそこから輪が広がっていく。

だから、ある意味、小さいけれども、そこが宝塚の文化・芸術は、歌劇だけじゃないんだよということを訴える一つの、小さいけども、すごい大きな核になるというふうに、私たちも思っているんです。だから、それをどう運用していくかは、これから市の手腕次第だとは思いますが、そういう場になるので、従来の受け身で素晴らしいものを鑑賞して、芸術を市民が享受したということではなくて、もっと発展的に自らがつくり出していくようになればと思う。

こういうことを言うのは、すごい古いお手本として、ヨーゼフ・ボイスという現代美術家がドイツにいたんですけども、その人が、社会彫刻ということをしているんです。社会を彫刻する。だから、アートという芸術って、プロの芸術家が、素晴らしい演奏をして、素晴らしい絵を描いて、見に行つて、見る側と受け取る側というふうに分断してしまうんですけども、決してそうではなくて、市民全てが、子ども、老若男女全てが表現者であつて、日々の暮らしの全てがアート。それが社会をつくつて、まちをつくつて、魅力ある宝塚をつくるという。

だから、農業をやっている方も、商業をやっている方も、学生も赤ちゃんもみんなが、日々暮らしていくこと自体が、すでにアートなんだよと。だから、それにまず市民のみんなに気付いてもらわないと、新しい施設も機能しないというか、それが気付いてもらえるような施設として、最初は回つてほしいなとは思っているんです。

全てが表現者だという視点で、ちょっとこのシートのところに戻すと、み

みんなが表現者で、みんながつくっていくんだ、文化・芸術を自分たちで掘り起こして、新しいものをクリエイトしていくんだという、そういう視点が「文化・歴史街道たからづか」として記載されており、これは大事なことなんですけども、それをないがしろにするのではなくて、それをベースにして、そこから一步新しいものを踏み出していくんだよと。従来の既成の概念ですごいものを宝塚として訴えるのではなくて、新しいものを売り出していくんだと。それは、大きなショッピングセンターのところにも、大きな国際美術館にも負けない文化になって根付いていくと思うんです。だから、そういう様子をイメージできるような文言が、この辺に入ってきてほしいなというのが、いま思うことです。

あと他の分野でもそうでしたけども、やっぱり情報の発信の仕方とか、本当に受け取り方も大きく変わってきていますし、これからはもうAIや、SNSもどう変わっていくか。そのうちインスタも廃れて、また違うのが出てくるでしょうし、そういう中で宝塚が、常に新しいアンテナを張って、それに乗かってどんどん発信できる。それも市の発信部署が責任を持ってやりますじゃなくて、市民、女子高生も含めて、みんながそれぞれで発信をして、その力も利用できるような仕組みをつくって行って、宝塚って、本当に新しい情報を常に発信しているよね、ちょっと宝塚のことを調べたら、何でも分かるかもみたいに。女性が活躍しているみたいなところでもつなげていけるでしょうし。

情報の出し方、情報の共有の仕方、市民の中でも知らないことがたくさんある、お互いに知らないこと、団体によって知らないこと、同じ団体でも地域ごとに全然知らないこととか、情報共有できていないとか、資産とかいい芽は、いっぱい宝塚にはあると思うので、それをただ情報として共有してつなげるだけでも、ものすごい力を持つと思うんです。看板も立てなくても、新しいITを使って、宝塚ならではの知らせ方ができるかもしれませんし、そこについて、かなり力を入れてやることで、全部がうまくいくような、希望的観測ですけども、気がしています。

あとアートの立場からいうと、アートってやっぱり得体が知れないもの、夢の世界というか、想像の世界なので。でも、だからこそ形がないものを、みんなで作っていくというところで、いろんな立場の人が、同じ土俵で意見を言い合えるという、そういうすてきな媒体でもあるんです。

なので、そういうことも踏まえて、未来的にこれから発展していくというイメージを入れた、みんなで作っていくという。一人一人が発信者なんだという、そういう要素をここで強く訴えてほしいなと思っております。

部会長

ありがとうございます。先ほど文化芸術センターで、委員のお話の延長上

でいうと、まちなかにそういうアートがあふれるような、そういう仕掛けをこのセンターから発信をする、学芸員さんを中心に。具体的には、例えば南口からこのセンターに来るときに、宝塚大橋を通るわけです。すでに彫刻がいっぱい乗っているわけです。彫刻の橋。そういうのも一緒にしましょうとか、あるいは、西谷に行きましょう。その情報はセンターが握っていると、まちなかがアートだらけになっていく。そんなセンターになっていけば、先ほどの委員のお話も具体化していくと思うんです。

委員

またさらに補足なんですけども、さっきの観光のところでも、神社仏閣とか、手塚治虫記念館もそうだし、温泉のこととか、すでに昔からあるもの、歴史文化とかもアートでつなぐことってできるんです。神社仏閣もアートですし、人が作り出した文化ですから、そういうのもアート、文化芸術というのは、本当に広く捉えるべきものですので、それにまずわれわれが気付かなければいけないなと思っています。

委員

ここで僕が思うのは、私が住んでいる中山五月台中学校の吹奏楽部は、1,200ある学校が参加する中で、兵庫県でもトップになって、全国大会に毎年行っています。

中山五月台中学校が帰ってきて凱旋して、発表会をするのがみつなかホールなんです。僕はいいと思っているんです。宝塚市でなぜ完結型の町をつくらなければいけないのと。何もかもある。だから、さっき言ったことでいえば、宝塚市なりの小さいホールがあるなら、それを最大限生かす方策で、みつなかホールもいいじゃないと。川西に行ったら何が悪いのと。むしろ川西の市民に宝塚の中学校は、これだけすごいんだぞと発信するという発想はないのかとか。

あるいは、病院でも子どもの救急は、伊丹に行かなければ駄目だと。なぜ宝塚市になきゃいけないか、宝塚市でなぜ完結しなければいけないの。子どもは、それで命が救えない距離まで行かなければいかんのかといたら、そんなことはない。だから、広域でやっているわけです。

だから、宝塚市民に3千人のホールが欲しいと運動を始めている人がいますけど、宝塚市でなぜ完結型の都市をつくらなければいかんのか。そこを切り替えたら、それはよそでいいんだというふうに変えれば、ここでやれること、ベガ・ホールを最大限に使う。小さいホールがあるなら、アートでつなぐ。それが特色だと。大きなものは外へ行けばいいよと、みつなかホールを使ったら、市と川西市で連携して安くするとか、いろいろお互いに使えるようにしたらいいじゃないですか。そういう発想が大事な。なかなか皆さん、宝塚市の政策というと、宝塚市の中で完結型を求めるから、こんなことになっているが、変えた方がいいと思う。

委員

またばりばり市民目線なんですけど、宝塚歌劇だけじゃないよという流れがあるのもすごくよく分かって、いま、委員が言っておられたのも、そのままでもいいと思うんですけども、やっぱり歌劇を絶対守りたいというか、大切にしたいし、育てたいと思うんです。

先ほど商業者が地域と交流するというけれど、市役所はもっと宝塚歌劇の本部と何かやって、歌劇は絶対大阪とかに行かないように、何かあるんじゃないかと思うんです。例えば宝塚歌劇をやめた人が働く場があるとか。そういう人たちが、また住んだりするから、市民の文化がまた育ったり、踊りとか歌を教えてくれる人が、そこここに住んでいたりするわけじゃないですか。飲み屋も発展したりする。

だから、そういうあれをしっかりとやってほしい。それがまたいろんなことに波及して。宝塚歌劇は、2千人ホールですよ。そこでもすごい文化を発信しているわけで、そう思って他は市民のためのというので、すごいいいと思う。だから、東京宝塚歌劇がある千代田区よりも宝塚市みたいな。千代田区がやっていないことを宝塚市がやるとか、何かないかなとも思います。

それと、歌劇の講演があると、2千人がどっと来るわけです。でも、どっと帰るんです、すごい勢いで。あれはなんとかならないのという感じがちょっと残念だったりします。

なぜ帰るのって聞いたら、あそこの近場でしゃべると、関係者が周りで聞いているかもしれないので、大阪ぐらいまで出て感想をしゃべりたいんです。やっぱり下手な店に入ってしゃべると、そこはもしかしたら違うファンの店だったりする。

委員

ちょっと別の話なんですけど、いま、宝塚大橋が、彫刻でつなげられているという話もあったんですけど、僕は、元宝塚市の職員の方に、宝塚市には埋蔵文化財がたくさんあると。例えば寄付された絵画であるとか。それから、僕が不思議に思っているのは、宝塚北高校の横の敷地のところに、石の彫刻がずっとほったらかしでほかにあるんです。それはいったいこの所有権のものか分からないんですけども、そういうものを例えばある程度著名な方の絵画であったりとか、彫刻であったりとかするんだと思うんですけど、それを例えばどこかの公民館であるとか、あちこちにばらまくとか、そんなこととかができないのかなと思うんですけど。それで、一つのネットワークというか、つないでいって、芸術回廊みたいなかたちで結んでいくというのはどうか。あとは、発信の問題がすごいあると思うんですけど、実際はどうなんですか。埋蔵文化財はあるんですか。

会長

埋蔵というか、市が所蔵している文化財ですね。

- 委員           それを埋蔵と言っているんです。
- 委員           その一つのハレの場としてのセンターというのもあります。だから、ベースの一つは、そういういただいたものとか、市が持っているものをみんなに見ていただきましょうというのがあります。見せる場所がなかったんです、いままで。
- 委員           それを例えば移動させて、どこかに持って行って、回廊をつくったりとか、そういうのは発想できるよね。
- 部会長        可能です。
- 委員           宝塚北高校の横に置いてあるあれは何なんですか。前に消防が練習していたところなんですけど。
- 委員           すごいカーブが終わった後のもう1個のカーブのところですよ。石のすごく大きいのが置いてある。
- 委員           幾つかあるよね。たぶん誰かが寄付したか、どこかにやったやつを移転させたと思うんです、邪魔やから。
- 部会長        そんなものを探して歩くツアーもありますよ。
- 市職員        大阪碎石の敷地内ですよ。
- 委員           そうなんですか。一時、消防が訓練で使っていましたよね。あれは、大阪碎石の敷地ですか。
- 市職員        碎石場だから、要らないものを捨ててあるのかなと思って見ていました。未確認です。
- 委員           ひょっとしたらですけど、私の知り合いの彫刻家かもしれない。いま、広島に引っ越して、広島大学の先生をしているんですけど、石の彫刻家で、まだ宝塚に住んでいたんです。おうちでつくるわけにもいかないんで、碎石場のどこかで場所を無償で貸してもらえて、そこで作業をしているみたいな話を聞いたことがあるんです。
- 詳しくは知らないんですけど。個人的に著明とは言えないかもしれませんが。でも、指導者としてすごい頑張っています。
- 部会長        だんだん話が盛り上がってきましたけど、もう一つありますので、少し時間を延ばしていただいてもいいですか。15分程度です。

## ⑦これからの都市経営

- 部会長        これからの都市経営ですけれども、ここは協働とか市民自治とか非常に重要な部分もございますので、できたらここもどんどん意見をいただければと思います。いかがでしょうか。
- 部会長        市民側の話で、市民自治とか、市民と行政の協働とかという部分もござい

ますので。いかがでしょう。事務局に案をまず出しなさいということではないでしょうか。

委員 部会長  
ここは、タカラ ミライ ラボのめざすまちの姿が入っていないですね。

委員  
これもやっぱり最初に「めざすまちの姿」ということで、住民が主体というのは当たり前のことみたいだけど、これからは宝塚市も人口が減ってきて、財政も細くなって、職員数も減らさないといけない可能性もあるという前提では、やっぱりそこを担って住民が満足できるまちづくりには、住民の力というものが、一言でいえば協働事業ということでしょうけど、住民がどう動くかが鍵になると思うので、ここは今まで以上に6次総合計画の重要なところだなと。

そのために6次総合計画には、まちづくり協議会がつくるまちづくり計画とリンクさせるということで、全体でまちをつくろうという住民の計画、行政計画、そういうこともあるので、ここは、今回の6次総合計画の大きなテーマではないかと思っています。

委員  
自治会というのが非常にキーワードになっていると思うんですけども、その自治会というものに対するメリットというのが、僕はいまいち見えてこないのが事実なんです。僕は入っていますよ。よそは知らないですけども、西谷は、年間の自治会の自治会費が幾らぐらいだと思いますか。1万2、3千円です。しかも自治会の奉仕活動に参加しなかったら、出不足金って取られます。変でしょう。それで、やめることは許されないみたいな。

ただ払っていて、メリットを感じない。西谷だけかもしれません。奉仕活動に参加しないと、罰金まで取られる。これはちょっとむちゃくちゃだと思いませんか。

委員  
ニュータウンの自治会と成り立ちが全然違うんです。西谷は、もう江戸時代から村落の集落の固まりが、いまになって自治会と名前を変えたので、道路の管理から何から、水路の管理から全部村ごとにやって、その村単位が、いま自治会になっているから、私のところとはちょっと違う。

委員  
確かに水路の管理は、水路の管理でまた別に交付金とか、そんなのとかからお金が出るし、それは農業者がやるべきことなんですよ。それで、うちの場合は、財産区の財産がまた別にあって、そこでは出たらお金が出るし、当たり前やと思う。自分らの財産として持っているものだから、それはそれでいいと思うんですけど、西谷に限ってかもしれないですけど、何か納得いかない。特殊な場合です。

部会長  
各論になっていますけど、その辺りのうまく整理をしながら、いろんな人たちが関われる地域活動にしていきたいと思いますというのもあると思うんです。

ずっと私は三田市の高平地区のお手伝いをしているんですけども、まちづくり協議会ができたことによって、区長会とまちづくり協議会の役割分担がうまくいったんです。

委員 高平はうまいことっていますよね。

部会長 はい。まちづくり協議会は、みんなで楽しく、できる人ができることをやろうよという雰囲気です。区長会は、区長会でいまままでおとりしかりとしたことをみんなでやろうよというように、うまく役割分担ができたんです。その辺りで、各地域で特徴をうまく受け止めながら、それぞれの地域自治を回していく。それが10年後、みんなが参加したくなるような地域活動とか、地域自治になっていけばいいなという願いがあります。

委員 例えば西谷に人に来てもらいましょうとかいう話をしているのに、自治会へ入ってくれ、自治会費は年間約1万だと。出なかったら罰金だというのはどうなのか。まちだったら自治会が年間2千、3千円で済んでいるところを。

部会長 おっしゃるとおりかと思います。だから、それが入ってこられなくなっている。逆に今度は、それが嫌で出ていっている人もいるかもしれない。

委員 そうなんですよ。ここから西谷がそれをやめようと言ってください。

部会長 西谷はやめろではなくて、たぶんこの南側の地域の中でも、同じような運営の仕方をしてしまうが故に、なかなか関わりにくいという地域も出てきているのは確かなんです。だから、そこはもっと20のまちづくり協議会の在り方の中で、もっとみんなが楽しく関わられるような、そんなやり方がいいよね。10年後は、全ての地域でそんな活動が展開したらいいよねみたいな、そういう、めざすべきまちの方向というのがあるのではないかと思います。

委員 ちょっとずれてしまうかもしれませんが、いま、自治会の加入率が58.8%で、60%を切っています。大きな目で見れば、戦争が終わるまでは、市役所なんてあんまり機能せずに、住民が自分で自分の村の面倒を見ていたのが、戦後、自治会というのが廃止されたり禁止されたりしながら、住民がやっていた仕事を市がやらなければならなくなって、どんどん肥大化して、今度は市が何でもかんでもやるから、住民がやらなくてもいい、特にニュータウンなんかは、住民がやらなくても、市が全部ごみの処理から、道から、市に連絡すれば終わるということだから、自治会のニーズがなくなって、入らなくても生活に困らないということになった。

だけど、これから10年先は、そうはいかないだろうと。市ができなくなってきて撤退をしたら、そこは誰がやるんだといったら、住民がやらざるを得なくなったら、そのときは自治会というのが、いまの組織であれば、一つは有効な利用できる機関かなということで、まちづくり協議会もその視点だけではないんですけど、自治会がまちをつくる中核であるという舞台。これが

らその役目というのは、この加入率がどんどん減ったとしても、これがもしなくなったら、支える人がいなくなる。宝塚で行政も支えられなくなる。誰が支えるんだ。

そうしたら、自治会ではなくて、テーマごとのアソシエーションが、支える以外にないという、そういうところだから、この自治会というのもそれなりに、5次総合計画でも加入率のアップというのは、ずいぶん言っていますけれども、下がる一方というところも。総合計画の中では、きちんと整理して、提案をしておかないとまずいのではないかなと思っています。

委員

いま、指定管理者制度が根付いてきているんですけども、そもそも指定管理者制度って、公共施設の運営を少しでも地域の組織が担えるようになったら、その公共施設がもっと地域に近い存在になるのではないかという目的が大きかったんです。でも、費用が安くなるとか、経済的なことばかりが取り沙汰されてしまうんですけども、地域の組織が、地域の施設の運営をするというような流れを、もっと確立していく10年じゃないかなと思って。

だから、自治体も市民組織とかなんとかと契約ができるとか、一般の普通の企業とやるのと同じように、甲乙でやる契約というのではなくて、一緒に地域を育てていく、地域の施設を運営していくというようなスタンスの市民組織との契約の仕方みたいなのもっと充実させていく、例えば自治会なんかまちづくり協議会とか地域の組織が、それで例えば潤って、個人からお金を取らなくてもそれでもうかって、やりたかったことができるようになるとか、地域の組織の流れを発展的に変えていくというようなことを、市民も市役所も一緒になって、その流れをつくっていく必要があるのではないかなと思います。

委員

それが協働だと思うんです。協働だと思うんだけど、例えばうちのまちがいまやっている川掃除であるとかが、協働に当たるのかといたらどうなるのかなと、分からないです。申請すればそれでいけるのか。

今朝から聞いていたのが、一人170円、自治会に対して、市が支援してくれているんですよ。50世帯以上だったら、3万9千円プラス何か。うちの村だったら50軒ぐらいだから、5、6万円の支援はしてもらっているみたいなんです。それがどこに消えているのか、会計で何かとごっちゃにして、ぼんと放り込まれているから分からない。

部会長

委員のいまのお話でいうと、何がちょっと違うかというところがとても重要で、無理やりやらされ感があるところが問題なのか、あるいは、市と自治会の関係が不透明なのか、いろいろあると思うんです。

ちょっと個人的なことを言わせていただくと、委員は、環境活動を積極的にやっておられるじゃないですか。それは自分がやりたいこと、好きなこと

だから入れるわけじゃないですか。そういう人たちが、自分がやりたいところを担いながら、それがパッケージになったら、全てのことをやれてしまっているというような、そんな地域活動が展開できないかなということじゃないかなと思うんです。

あと委員のお話があれば、ちょっと私も市役所側に考えていただきたいのは、自分たちがやっていることを外に投げちゃうと、それで協働だとか、新しい公共だとかという錯覚が起こっている部分があるんだけど、そうじゃなくて一緒にパートナーとして、市は市としての役割としてやっていかないといけないし、投げたら投げたで、自分たちは、その投げた分が何かに変わっていかないといけないというような、共に変わっていく新しい協働であるべきじゃないかなと思うので、そこをもう1回共有しておきたいなというのがあります。

委員 委員のおっしゃった指定管理、私のところで三つのコミュニティの子ども館を運営しているんです、協議会をつくって、契約が議会を通過して、あと5年、また来年からやるという話がありました。

契約を結んだときに、契約書自体が、利用者と結ぶ内容になっているわけです。甲は乙で、乙はこうすべきである、こうなさいというふうに。しかも指定管理の方針を見ると、評価表を出す目的は、市が監督すると書いてある。監督という言葉がいまでも入っていますけど。契約書自体は、私たち契約主と話をし、対等の表現をしよう。Aはこうする、Bはこうする。AがBにこうしろという書き方はやめようと言って、全部変えてもらいました。

やっぱりそういう市の仕組みは分かります。いままでも行政は、そういう処分をするときに、こういう文書でやってくれとなるので、そこも変えてもらわないと、一緒にやっているという気にならないのです。そこを変えて提案をするというのはなかなかないので、そこもやっぱり本当の行政の方も、そういう改革というか見直しをして一緒にやるというので、そこは大事なことで、ぜひ10年間で取り組んでほしいなと思っています。

部会長 お約束の時間になりましたので、この辺りで今回は切らせていただきまして、また事務局と私の方で相談させていただいて、この第2部会の担当の部分を素案というかたちで出させていただきます。

それでは、本日の議事の方は、これで終了させていただきたいと思いますが、その他につきまして、事務局から何かありますでしょうか。

事務局 次第に記載されていますとおり、次の部会が第2回になりますが、10月9日、第3回が11月28日となります。時間と場所は、本日と同じ18時30分こちらの会議室になります。以上です。

部会長 ありがとうございます。それでは、今日は15分オーバーしましたけれども、

これで閉会させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。  
(終了)